

審査員特別賞

「SDGs未来都市「サンゴの村」恩納村 持続発展型環境保全景観づくり ～恩納村の赤土等流出防止対策～」

富着 開（恩納村役場 商工観光課）

桐野 龍（恩納村赤土等流出防止対策地域協議会）

1. はじめに

平成30年7月21日の恩納村夏祭り「うんなまつり」において、恩納村「サンゴの村宣言」が行われた。自然の恩恵なしでは生きていけないことを認識し、生活様式や社会経済活動のあり方を行政・村民・事業者が一体となって環境負荷の少ない持続的発展が可能な社会の構築に向けた宣言である。この「サンゴの村づくり」に向けた取組が、国連のSDGs(持続可能な開発目標)の理念と共通する点が多いことから、持続可能な開発目標の達成に向けた優れた都市として、「SDGs未来都市」及び「自治体SDGsモデル事業」に選定された。この「サンゴの村宣言」を見据えて平成29年度より、陸域の環境保全活動に向けて「恩納村赤土等流出防止対策地域協議会」を設立。サンゴ保全のため、農地からの赤土等流出防止対策を強化してきた。今回は、農地からの赤土等流出防止対策の新しい取り組みと観光景観を持続させる取組の「つなぎ役」について説明したい。



図3. サンゴの村宣言書



図1. 「サンゴの村宣言」(平成30年7月21日)

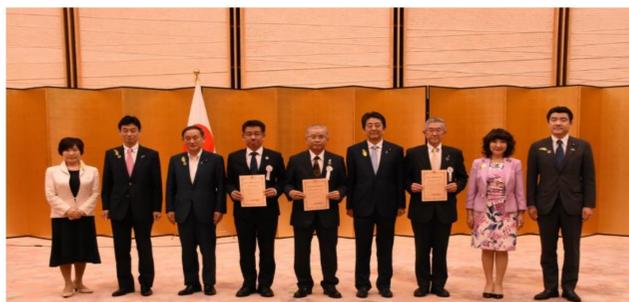


図2. 「SDGs未来都市」に選定(令和元年7月1日)

2. 恩納村の赤土等流出防止対策

平成29年度に恩納村赤土等流出防止対策地域協議会が設立され3年目に入った。順調に対策が進む中持続可能な対策方法の模索が急務である。初年度より、養蜂を赤土対策に活用できないか試行を重ね、今年度より「令和元年度ふるさと納税応援基金」を活用し本格的な活動を始めた。ミツバチは花と緑、きれいな水の豊かな場所でないと生存が難しいため、その地域の環境条件を計ることのできる「環境指標生物」のひとつで、授粉者として樹木の生育を助け植物多様性を広め、そこに鳥などの生物たちが集まることで生物多様性にも重要な役割を果たす。人間の食を担う農業にとっても大きな役割を果たし、農業経済効果に大きな役割を持つ。この特徴と環境保全がマッチすればさらに大きな活動の担い手になるし、県外修学旅行生や地域の子供たちに対する環境学習の主役としても大きなポテンシャルがある。行き詰る県内の赤土等流出防止対策に新しい形を提案し、赤土等流出防止対策を様々な環境保全活動の点と点を結びつけることで機運と周知力を高めることに繋がり、それがいつの間にか皆の意識の中に浸透していく事を願う。



沖縄には、外国等に比べてミツバチのエサとなるような蜜源植物環境が少ないため、緑化の推進、里地里山や森林の保護が必要。
ミツバチの住みやすい環境を作るとは、結果的に私たち人間にとっても住み良い環境に繋がる。



図5. サンフラワーPJ×ひまわりの絆PJ in 恩納村



地域農家への普及啓発



地域子ども達への普及啓発



地域子ども達が体感

図4. 普及啓発活動の様子

3. 平成30年度 観光競争力強化のための魅力的な景観創出検討業務

1) 目的

沖縄県の観光推進にあたり、道路景観は来訪者に対して、沖縄のイメージを与える重要な要素である。北部と南部を繋ぐ58号線(恩納村海岸線地区)は、リゾート地としての景観形成や安全な走行性が期待されることから、当該路線の道路景観の再生・更新を検討する。

なお、国道58号線(恩納村海岸線地区)は「平成29年度 沖縄の道路緑化のあり方に関する検討会」にてモデル地区として決定されている。

2) 基本的考え方と方針

恩納村海岸線地区は、リゾートエリアであることから、道路景観という線的景観形成だけでなく、地域全体のエリア・マネジメントの観点から沖縄らしい自然風景や、人々の賑わいが感じられる景観を創り・育てていく事が重要である。

このことを踏まえて、リゾートエリアとして沖縄らしい風景・風土を体感できる道路・環境を再生することを基本的考え方とする。

(1) 沖縄らしさを体感する景観を道路利用者へ提供する

- ① リゾートエリアとして質の高い道路景観を再生する。
- ② 連続的な海への眺望景観を再生・維持する。
- ③ リゾートエリアを印象づけるエリアへの導入景観を整備する。

(2) 公・民の緑が一体となって沖縄らしさが増幅される道路景観の形成やその利・活用を図る。

- ① ホテルや飲食店等と連携し、道路に賑わいがにじみ出るような外構の工夫や道路利用を推進する。
- ② ホテルの緑化やボランディア花壇等、現行の取組を一層推進し、華やかで親しみのある道路景観の形成を図る。

(3) 良好な景観と安全の確保を基本とした、効果的・効率的な管理を推進する。

- ① 不健全な街路樹や既存木を撤去または更新し、景観の再生と管理費の圧縮を図る。
- ② 計画的な管理や新たな施行にチャレンジすることにより、効果的・効率的な管理を推進する。



図6. 恩納村モデル花壇などの植栽イベントの様子

4. 官民連携の可能性

1) 恩納村の取組

- 恩納村では、平成29年度4月1日より年間を通して良好な景観を維持する取り組み「恩納村緑の美ら回廊プロジェクト」を実施
- 上記取組を長期的に進めるために「恩納村美化活動推進協議会」を設置。構成は、恩納村、恩納村観光協会、恩納村商工会の三者で、事務局は恩納村観光協会に置く。
- 有償活動と無償活動の二種類があり、いずれも「恩納村沿道等美化活動参加取り組み合意書」を取り交わし定期的な美化活動を実施(毎月第2週の土または日曜日の1日)
- 有償活動は恩納村沿道等重点管理区域(国道・県道)に指定された場所での活動(主に草刈り活動、時給800円、1日4時間程度)、無償活動は現在約80団体(個人含む)が事業所や居住に面する歩道や広場など定期的に活動できる範囲で実施
- 活動資金はふるさと納税寄付金を活用



図7. 美化活動の様子



図8. 美化活動の成果

2) 官民連携体制づくりに向けて

恩納村では、住民、事業者、関係団体等が連携した美化活動(除草、植栽、掃除等)が実践されており、村全体で良好な環境・景観づくりに向けて取り組んでいる。しかし、長期的に活動を推進するために、ふるさと納税に変わる新たな資金源の開拓が課題である。

恩納村はホテルや飲食店などの事業所が多いことから、オープンカフェやベンチ及び上屋の設置、レンタサイクルなど事業所が道路空間を活用しその場所を維持管理する取組みが考えられる。

以上より、恩納村型官民連携はボランティア・サポートプログラムの活用と併せ、道路協力団体体制の活用を検討する。



図9. 関係団体等による美化活動の様子

5. SDGs未来都市「サンゴの村」持続発展型環境保全赤土対策

上記で説明してきた内容を踏まえ、赤土等流出防止対策のひとつとして出たアイデアの養蜂(ミツバチ)をサンゴの村づくりの「お手伝い役」に迎え、そのミツバチの住みやすい環境を我々が整えることで我々自身の生活環境が変わっていく仕組みを創りたい。そこには、大きな経済活動になる可能性もあり、持続的で発展的な未来都市が創出する。



図10. 持続的で発展可能な未来都市の仕組み

6. おわりに

県内の10市町村で赤土等流出防止営農対策促進事業が進められている中、恩納村では3年目にも関わらず事業の進捗がスムーズに進んでいる。これは、村の進める「サンゴの村」行動計画に基づき役場全体、企業・団体、さらには村民の意識が「ひとつ」にまとまりやすく、各々の事業計画に入れ込みやすいことが要因だ。認知度の低い農地からの赤土等流出防止対策をスムーズに実施しやすかった経験より、県知事が推奨する「誰一人取り残すことのない沖縄らしい優しい社会、自立型経済を目指し、官民学連携し、将来に向けて取り組む姿をSDGsからも模索したい」と述べ、全庁的な施策に反映させたいと説明している。という琉球新報の新聞記事を拝見し、SDGs未来都市「サンゴの村」恩納村の取組が県内の見本となり沖縄県全体での持続発展型環境保全活動が活発になることを願う。



図11. 「サンゴの村宣言」SDGsプロジェクト